

ラロログ 代理出産をもとめて

007

ある日の、同窓会、

009

おっぱい博士の挑戦

021

禁止する法律も、認める法律もない

028



「第一話」

母から娘へ伝えられた想い

035

それは記者会見から始まった

037

生後まもなくの子宮摘出

039

悲しみの涙と喜びの涙

053

母になるということ

074

よく来てくれました

088

いまある幸せに感謝しつつ

104

「第二話」

だれにでも起こりうることなのだから

107

新婚一年目のがん宣告

109

二年待つての挑戦

118

受精卵の大移動

130

千羽鶴がコウノトリに

137

当事者になってこそ分かる

147

「第三話」

依頼夫婦と子どもをめぐる動き 159

制度の狭間で——普通養子と特別養子 161

口キタンスキー症候群と分かつて 167

裁判所との一年のやりとりを通じ 181

これまでの議論をふり返ると 197

議論は学会議に移って 217

果たして「子どもの福祉」とは 227

「第四話」

代理出産も不妊治療のひとつ 231

物議をかもした記者会見 233

不妊治療ゆえの苦しみ、葛藤も 241

子どもはできなかつたけど幸せ、といえるために

わたしたち家族と代理出産 255

代理出産——私の挑戦 根津八紘 271

代理出産のきっかけ 273

減胎手術から始まった戦い 278

一三年間の実践 283

私に対峙してきた理由 289

原点に立ち返って 295

コラム・高齢不妊と代理出産／106 生殖医療をめぐる各国の法制度／207

養子制度と日本と海外では／253

あとがき 297

巻末資料……代理出産ガイドライン／生殖医療の歴史

[プロローグ]

代理出産をもとめて



*本文中の患者・家族の名前はすべて仮名です

あゝ口の、同窓会、

◇ 孫を産む？

二〇〇九年の五月初め。長野県の諏訪湖にほど近い「諏訪マタニティークリニック」には、三組の家族が集まり、お茶を飲みつつ談笑していた。

うち二組は、まもなく出産を控えている妊婦とその家族。もう一組は、すでに産んで一年になる女性ら家族と、一歳になった男の子だ。

男の子は元気にじゆうたんをはい回り遊んでいる。それを若い両親がわかるがわるあやして、周囲がその様子を微笑ましく見ていたり、賑やかでもあり和んだ雰囲気だ。

「私、帝王切開ていおうせつかいするのって初めてなんです。どんな感じでしたか？」
妊婦の一人が、大きくなっているお腹をさすりながら、出産経験者の女性に尋ねる。

「私も初めてだったので、する前はちょっと『怖いかな?』と思いました。でも、考えてみ

たら、この歳で自力で産むっていうのもたしかに無理でしょうからねえ……。やってみたら、とっても楽でしたよ」

「産んだ後にホルモンが急激に変化して、どっと更年期障害（こうねんきしょうがい）になったりはしませんでしたか？」

もう一人の妊婦も尋ねる。

「それも大丈夫でしたね。産後すぐから先生が、更年期障害予防のためのホルモン補充をしてくださいますし」

「産んだお子さんは、やっぱり『実子（じっし）』というより『孫』という感じですか？ 私、自分にはまだ孫がないから、どうなのかちょっと分からなくて……」

「ええ、孫ですね。実子とは違います。最初からそう思いました」

——「この歳で産む」とか「更年期障害になる」とか、「実子ではなく孫だ」とか、いったい何を話しているの？と、突然この会話に入ってきた人ならば混乱するかもしれない。

実はこの三人の女性は、いずれも代理出産に臨み、代理母（だいにりぼ）となった五〇歳代の女性たち。しかも皆、生まれつきもしくは病気などの理由で子宮がない娘（二〇～三〇歳代）に代わって子どもを産む、つまり自身から見れば孫を産むことに挑戦した人たちだ。そして、本書にこれから

登場してくる人物たちである。

紹介すると、一組目は、飯島夏美さん（二七歳）・阿部陽子さん（五三歳）の親子。陽子さんは、娘・夏美さん夫婦の子を妊娠中だ。

夏美さんは背が高く、子どものころからスポーツが得意だったという健康的な女性。物怖じせず話すように見えて、細やかな面も持ち合わせている。一方、母・陽子さんは、夏美さん含め四人も子どもを育てたとあって、自分の考えを表現できる、しっかりした女性といえよう。

二組目は、森本愛さん（三〇歳）・白井まどかさん（五四歳）親子。まどかさんは、娘・愛さん夫婦の子どもを妊娠している。

愛さんは、体は一見きゃしゃで、話しぶりもおっとりしているが、芯は通っている印象。母・まどかさんは、上品でありながらも話すときよく笑う、気さくな人柄だ。

三組目は、辻美穂さん（二七歳）・田辺由美子さん（五九歳）親子。由美子さんは一年前に、娘・美穂さん夫婦の子ども・遼太郎ちゃんを出産した。

美穂さんは、色白で清楚な印象。面影は母・由美子さんと似ている部分もあり、物静かに話す様子も母娘で似ている。

◆独自のガイドラインとは

諏訪マタニティークリニック（以下、諏訪マタ）では二〇〇一年、日本で最初に代理出産をおこなったことを公表した。医療界・マスコミをはじめ社会から激しいバッシングを受け、その是非をめぐる論争の渦中にいまもありながら、諏訪マタは代理出産を実施し続けている。

とはいえ、だれにでも実施しているわけではない。同病院では独自にガイドライン（巻末資料参照）を設けており、そこで対象としているのは、病気や生まれつきの理由により子宮のない女性。しかも結婚しており、卵子と精子はどちらも依頼夫婦のものである場合と限っている。つまり生まれてくる子どもは、代理母のお腹から出てはくるものの、遺伝的つながりは依頼夫婦双方との間にあることになる。

また、代理母となる女性の条件は、既婚で子どもがおり、金銭や権利などを求めずボランティアで引き受けてくれる人と定めているが、二〇〇三年からは特に依頼夫婦（妻）じつぼの実母に限っておこなうこと＊にしている。

初めての実施公表からこの「同窓会」の時点までに、同病院で代理出産により生まれた子どもの数は八組一〇人。うち、依頼妻の実母、つまり生まれてくる子どもにとっては祖母が産んだ例は、四組四人（辻美穂さん親子含む）となる。そしてさらに、妊娠中なのが三組三人（飯島夏

美さん親子、森本愛さん親子、ほかもう一組の親子)だ。

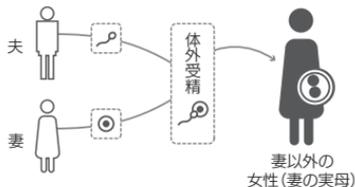
「祖母が孫を産む」というと、なかには「よぼよぼのおばあちゃんか」と想像する人もいるようだが、実際のこの女性たちは見たところとても元気で、「おばあちゃん」と呼ぶにはまだまだ早いように見える。

ただ、やはり年齢を考えると、分娩^{ぶんべん}進行中にさまざまリスクが発生し得る自然^{しぜん}分娩^{ぶんべん}よりも、予定をたてて環境を整えて臨む帝王切開のほうが適切と考えられる。それに、高齢出産でリスクの高い場合は帝王切開を選ぶというのが、世の中の主流でもある。

「帝王切開した後の、術後の経過はどうでした? 若いときの出産より苦労が多いのかなあ

* 1 母娘による代理出産

代理母を当面のあいだ依頼妻の実母に限った理由は、公に社会のサポート体制のできていない中ではこの方法が最もトラブルが少ないとの判断があったからである。



[第一話]

母から娘へ伝えられた想い



それは記者会見から始まった

二〇〇八年四月一六日。日本学術会議の「生殖補助医療の在り方検討委員会」が、代理出産について「原則禁止」とまとめた報告書を厚生労働大臣・法務大臣に提出したその日、諏訪マタニティークリニック院長の根津八紘は学術会議の報告書に異議を唱える記者会見を開催。そこに、これから代理出産に挑戦しようと望んでいる一組の母娘も同席した。

「娘は、一歳四カ月のときに子宮に腫瘍が見つかり、子宮をすべて摘出しました。代理出産という方法でしか、子どもを授かることができません。どうか皆さん、扉を閉ざさなideください」

集まった大勢の報道陣やカメラの砲列を前に、毅然とした姿で訴えるのは、母・阿部陽子さん（当時・五二歳）。その隣で、涙をぬぐっているのが娘の飯島夏美さん（当時・二六歳）だ。

「夫と私の遺伝子を受け継いだ子をこの手で抱きたい」

夏美さんは、泣きはらした顔をゆつくりと上げ、静かに、でもしっかりと訴えた。

記者たちから質問が飛ぶ。

「お母様の年齢が五二歳ということですが、体に対する不安や危険は感じませんか？」

「心配していません。根津先生のことを信じていますし、すべて信頼してお任せしたいと思っています」

母の陽子さんがきつぱりと答える。

「娘は何か悪いことをして病気になったわけではない。子どもをほしいと思うことはいけなことでしょうか？ どうか私たちのような人間もいるのだということを知ってください」

そしてこの日より、母娘の代理出産への挑戦がスタートを切った。

生後まもなくの子宮摘出

◇ 大きな代償

陽子さんはこれまでに四人の子どもを産んだ母であり、夏美さんは陽子さんにとって初めての子、そして唯一の女の子である。夏美さんの下のきょうだい三人は全員男の子だ。

夏美さんの体に、母・陽子さんが異変を感じたのは、夏美さんが一歳を過ぎたあたりのころだった。

服を着替えさせようとしてお腹に手が触れると、何かぼっこりと丸いものが当たるのを感じる。

「なんだろう？ どんな赤ちゃんにもあるものなのかな……？」

たまたま近所の診療所に行った際、気になってレントゲンを撮り診てもらうと、「らんぞうのう卵巣嚢腫しゅ*かもしれない」と医師は言う。

「え？ 卵巣嚢腫っていつても、まだこんなに小さな子どもにも卵巣なんてあるの……？」
そう思いながらも、すぐに大きな病院に行くよう紹介された。

病院の医師は、夏美さんを診て、「新種の子宮筋腫きんしゅかもしれない。とにかく開腹かいふくしてみないとわからない」と言う。

陽子さんは当時、第二子を妊娠中で、手術中は夫と二人で別室で待っていた。途中、夫だけが医師に呼ばれ、しばらくしてまた戻ってきた。夏美さんのお腹を開腹してみたところ、子宮は海綿状かいめんじょう血管腫けっかんしゅによって六〇〇グラムもの重さになっており、子宮を全部取らなければいけないと言われたという。

「承諾したの？」

問い詰める陽子さんに、夫は

「だって、切らないと死ぬって言うから……」

目の前が真っ暗になった。

「大声で泣きわめきました。母として、同じ女として、とても耐えられなくて……」（陽子さん）
その後の病理検査びょうりで、腫瘍はがんなどの悪性のもではなく、転移てんいもしていないことが分かった。

「取らなかつたら、どうなっていたんですか?」

あきらめきれず尋ねる陽子さんに医師は「やはり破裂して、命にかかわることになっていました」と、実際の摘出した子宮も見せ説明する。「でも、卵巣は残りましたので、成長すればちゃんと女性らしい体になります。……命が助かった分、どうか大切に育ててください」

◆ 母への手紙

夏美さんはその後、問題もなく元気に成長していった。が、陽子さんにとって常に気がかりだったのは、「本人にいつ、どう事実を言うべきか」、そして「いつ本人から聞かれるか」だ。

* 1 卵巣嚢腫 [本文 p39]

卵巣に液体の入った袋状のものができる。ただ、ほとんどは良性の腫瘍であり、がん化するものは少ない。子宮筋腫と並んで最も発生頻度が高い腫瘍のひとつ。症状はないことのほうが多く、まれに下腹部痛を生じる場合があり、時として卵巣の付着部がよじれ、緊急手術を要する。良性と判断された場合、腫瘍部分だけを取り除く手術をする場合がある。

* 2 海綿状(深部)血管腫

血管腫とは、網目状に血管が増殖し、血液を含むスポンジ状になった組織。子宮にこのような腫瘍が形成されるのは非常にまれなことで、時に肥大化(ひだいか)し破裂する危険性を持つ。

子宮がない・子どもが産めない体だと知って、男の人と付き合うのが怖い・あきらめようと思うことがあつたらどうしようと不安だった。

医師が言っていたとおり、夏美さんは同年代の女の子と同じように女性らしい体つきに変わっていった。だんだん、周りの女の子たちには生理が来て、近所の人からも陽子さんは「夏美ちゃんにもそろそろ来た？」と聞かれるようになる。しかし、夏美さんに生理は来ない。「私も生理が来るのが遅かったので、娘も遅いみたい」と、陽子さんはうそを言つてごまかしていた。

一方の夏美さんも、同年代の友だちには来ている生理が、自分には来ないことを不思議に思っていた。お腹に傷もあるので、何か関係があるのかもと思つて理由を母親に尋ねると、「小さいときに子宮の近くにあつたおできを手術して取つたから、生理は来るかもしれないし、来ないかもしれない」という答えが返ってくる。

「ふーん、そうなの？」

夏美さんもそれ以上のことは聞かなかつた。それ以上聞いてはいけないような雰囲気になんとなく感じられたのだという。

生理はないものの、夏美さんはときおり腹痛を訴えることがあつた。

陽子さんが一度だけ、「娘に知られたのでは？」とヒヤリとしたことがある。夏美さんが中学生くらいのおとき腹部の痛みを訴えたので、子宮摘出をした病院を久々に受診した際のこと。当時の医師はもうおらず、新しい医師は過去の膨大なカルテを見ながら「全摘ぜんてきだったんですね」と口にした。「全摘」とは子宮をすべて摘出したことを意味する。

「いまの言葉で気付かれたかとも思っただけで娘のほうを見ましたが、娘はただ目をパチクリさせていて、全摘の意味を理解していなかったようです」（陽子さん）

しかし、やはりいつまでもごまかせるわけがない。中学を終え、高校生になっても生理が来なくなつた時点で、「さすがにこれは変だ」と夏美さんは思い始めた。

たまたま夏美さんには、塾や学校で友だちのように仲良くしてきた先輩がおり、彼女の父親が産婦人科の医師だった。

高校卒業後、専門学校に進み、「まだ生理が来ないんだよね」と話す二一歳の夏美さんに、先輩は「じゃあ、うちのお父さんに一度診てもらえば？」と勧めてくれた。

二〇〇三年六月、夏美さんは先輩の父親のクリニックを訪れた。

先輩の父親は、内診やエコーなどの結果を夏美さんに見せ、「ここに本来は子宮があるんだけど、映っていないんだよね」と教えてくれた。

[第四話]

代理出産も不妊治療のひとつ



物議をかもした記者会見

◇「根津を泣かせた女」と呼ばれて

「人の助けがなければ子どもを産めない人間もいるということを、どうか分かってください」
二〇〇七年四月一二日、代理出産や非配偶者間体外受精などの不妊治療に臨む患者たちが、根津とともに記者会見に出席し、自らの立場を理解してほしいと訴えた。

目の前には大勢の報道陣と、おびただしくたかれるカメラのフラッシュ。勇気を持ち、ときに声を詰まらせつつも自らの思いを訴える患者たちの姿に、根津もまた感極まって涙を流した。そして、

「患者さんを救うためには、代理母となるボランティアを募っていくことも必要だろう」と発言。これが「根津医師が代理母のボランティアを公募」とやや誇張して報じられ、またもや世の物議をかもすことになった。

この記者会見の席には、実母を代理母として代理出産に挑戦したものの、成功にいたらず断念した野口麻美さんの姿もあった。

記者会見以降、「オレを泣かした女(笑)」と根津が呼び親しむ一人である彼女は、「子どもは授からなかったけど、私も子どもを持てるかも!と希望を持つことができた。代理出産にチャレンジできただけでも、『私は自分の人生を生きている』と言える大きな意義があった」と振り返る。

◆私の子宮を娘に移殖してください!

麻美さんもまた、子宮の問題により代理出産でしか子どもを産めない体だ。

「子どもが産めないってどういうこと?」

事実が分かったとき、麻美さんも母・美智子さんも打ちのめされるような思いだった。

母は医師に、「私の子宮を娘に移殖してください!」と懇願した。しかし、子宮の移植などできるわけではない、と冷たく言われ落胆し、なにか他に方法はあるのではと必死に模索した。

一方、夫は「それを知ってお前もつらかっただろう」と言い、特別に子どもをほしいという様子は麻美さんには見せなかった。

しかし、麻美さんはやはりどうしても子どもがほしい。アメリカでの代理出産を考えるようになり、二〇〇三年ごろから準備を始める。

ところが、卵子が採取できるかどうか受診した大きな病院では「エコー上では卵巣が見えない」と言われ、アメリカでの代理出産を仲介するセンターも「採卵は不可能でしょう」と言う。でも、本当に採卵できないのだろうか？ ほかに診てくれる医療機関を探して、とにかく卵子だけでも採取してもらい、アメリカへ行こう——そう思ったときに頭に浮かんだのが、代理出産をしていることがすでに報じられていた諏訪マタだった。

実は、できれば最初から諏訪マタで代理出産に挑戦したかったのだが、当時の諏訪マタは「既婚で子どもがいる姉妹」を代理母とする出産しか実施していないと麻美さんは思い込んでおり、三歳下の既婚の弟と、まだ当時小学生の妹しかいない自分は対象外だと思っていたのだ。実際の諏訪マタは、二〇〇三年より実母を代理母とする出産に切り替えていたのだが。

「不妊治療患者さんの間でも、諏訪マタは最後の砦的な存在で当時知られていました。ここでも採卵がだめなら、あきらめもつくだろう、そう思ってたにかく連絡することにしました」二〇〇四年一月、あくまで採卵だけを目的に、麻美さんは諏訪マタの門を叩いた。すると、他院ではエコーに映らないといわれていた卵巣が、映っているといわれる。